

カルミナ・クアルテット

CARMINA QUARTET

ヨーロッパの感動を連れて来た!

さわやか新緑コンサート

6月2日(土)19:00

たんば田園交響ホール

入場料 ¥3,500 (当日 ¥4,000)

学生鑑賞料 ¥1,000 (ホールのみ)

〈全席指定〉

モーツァルト: 弦楽四重奏曲 第15番 二短調 K.421

シューベルト: 弦楽四重奏曲 第12番 ハ短調 D.703「四重奏断章」

シューベルト: 弦楽四重奏曲 第14番 二短調 D.810「死と乙女」



〈主催〉篠山町

〈後援〉スイス大使館

〈企画〉カザルスホール企画室

お問い合わせ

☎(0795)52-3600 たんば田園交響ホール
〒669-23 兵庫県多紀郡篠山町北新町41

前売券発売所 ■篠山町内/書店・楽器・レコード店・役場支所 ■多紀郡内/各町公民館(各農協で取次)

■氷上郡/春日町文化ホール・柏原観光案内所 ■三田市/ニチイ三田店サービスコーナー ■京都府/両丹プレイガイド

カルミナ・クアルテット

Carmina Quartet

1984年にスイスで結成される。87年6月、イタリアのエミリアで開催されたパオロ・ボルチアーニ弦楽四重奏コンクールで1位なしの第2位を受賞。結成後わずか3年にして国際舞台に躍り出る。87年10月、ロンドン・ウイグモアホールでのデビューコンサートは前売で売り切れさらにこのシーズン3回のウイグモアホールでのコンサートも、すべて満員札止めとなる。

コンクールの入賞とウイグモアホール的好评により、一挙に評価が高まり、87年よりツアーを開始。87—88年のシーズンには、ヨーロッパ各都市をはじめ、日本、香港、イスラエル、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドで、年間100回以上の公演が行われた。88年4月にはカザルスホール・デビューコンサートシリーズに出演、ベルク、モーツァルト、シューマンの弦楽四重奏曲を演奏し絶賛を浴びる。また89年4月にはイタリア・ボローニャで、さらに90年4月にはウイグモアホールで内田光子と共演する。

演奏会はいつも喝采とともに終わった。

そしてヨーロッパの気むずかしい批評家たちが、声をそろえて激賞した。

カルミナ、彼らがヨーロッパの新しい正統派だ。

塗り替えられつつあるクアルテットの世界地図

カルミナ・クアルテットは「フレッシュ」という言葉で表わされます。しかしそれは、洗練されたアンサンブル、緻密な構築性、完璧な技術、きめ細やかなタッチ、清明な音色などをすべて身につけた上での「新鮮さ」なのです。ハイドン、モーツァルトからウェーベルン、シェックまで幅広いレパートリーと、いかなる音楽にも対応できる柔軟さを持つカルミナ・クアルテット。輝ける未来を約束されたクアルテットがふたたび日本を訪れます。



■マチアス・エンデルレ(第1ヴァイオリン)

チューリヒ生まれ。ヴィンターツル音楽院のアイダ・ピラッチーニ・シュツキの元で学び「ソロ・ディプロマ」を取得。さらにグスタードの国際メニューン・アカデミーでも研鑽を積み、助手となる。カメラータ・リジーのコンサートマスターを務め、同団のソリストとしても活躍した。

■ウエンディ・チャンブニー(ヴィオラ)

オハイオ州イオロー・スプリング生まれ。インディア大学ブルーミントン校でフランコ・ギリとジェイムズ・バスウェ

ルに師事。1982年、ベオグラードのヴィオラ新人コンクールで入賞した。

■スザンヌ・フランク(第2ヴァイオリン)

サン・ゴレン生まれ。エンデルレと同じくヴィンターツル音楽院のアイダ・ピラッチーニ・シュツキの元で学び「ソロ・ディプロマ」を取得する。

■ステファン・ゲルナー(チェロ)

ヴィターツルで生まれる。ヴィンターツル音楽院卒業後、ジュリアード音楽院でレナード・ローズ、パリでモーリス・ジャンドロに師事。ヨーロッパ、アメリカのコンクールで多数入賞している。

《演奏会評》

フレッシュなスイスの団体の、フレッシュな演奏

カルミナ・クアルテットは4人とも20代前半というフレッシュなスイスの団体。演奏の方もフレッシュ。挑戦的でも反抗的でもなく、常に優しさや善意を土台としつつ若々しい創造力がある。4人の技術や音楽性が高いレベルで一致しており、第1ヴァイオリン優先形でなく、4人の共同作業として音楽していた点も、この団体の大きな美点としてあげられよう。4人とも雑でない細やかな耳と心を有しており、音程にも音色にも音量にも神経が通っており、自然な息づかいで発散し、あるいは沈潜し、立体感大きな演奏を生み上げていたのである。心ときめかせて

聴いた。〔長谷川武久—音楽の友88年6月号〕

カルミナ、ブラヴオー！

1984年結成されたこのクアルテットのメンバーはみな若く、情熱があり、驚くほど献身的である。演奏は言うまでもなく申し分ない。それぞれがコミュニケーションのすばらしさ、繊細な音楽性、そして見事な調和がある。

カルミナ、ブラヴオー！〔ベンジャミン・パーラム—88年5月31日付イエルサレム・ポスト紙〕

まるで交響曲のスケールが 感じられたシューベルト

新しく生まれたり、才能豊かな弦楽四

重奏団が数多くあるが、その中でも、スイス生まれのカルミナ・クアルテットほど急速に多くの注目を浴びているグループはすくない。

ドラマティックな対照が顕著なシューベルトを、激しい感情表現を恐れずにカルミナは演奏した。幅のあるダイナミックレンジと表現の変化は驚くほど奥深く、演奏は堂々として、まるで交響曲のスケールが感じられた。ハイドンでは微妙かつ軽妙な演奏を聴かせてくれた。このグループがより古典的な演奏のできることを極めて説得力を持って示した曲目だった。〔R. H. —88年7月11日付デイリー・テレグラフ〕